

## 「日本におけるキリスト教フェミニズム運動史研究—70年代から現在まで」研究会 沖繩におけるキリスト者フェミニズムの視点

高里 鈴代

沖繩におけるキリスト者フェミニズムの視点として、自分史を振り返りつつその中で感じてきたことを話したいと思います。

### 1. 幼少期から中学校まで一痛みの経験から

私の母は沖繩県立一高女時代に洗礼を受けたクリスチャンでした。故郷の宮古島で小学校教師となり、同郷の東京農大在学中の父と結婚。そのまま宮古で教師を続け、父の卒業後、台湾総督府農林省で働くことになった父とともに台湾に渡り、15年間生活しました。私は1940年に四女として生まれ下に弟がいます。父はその後農林省技術者として徴兵され、インドネシアで終戦を迎え、母は4人の子どもを連れて台湾から宮古に引き揚げました。戦後、父は群島政府立宮古農林高校の初代校長になり教育と農業生産に取り組み、母は祖父母と共に養豚や畑仕事、またお琴の教師をこなしつつ宮古教会につながっていました。夜の祈祷会ではいつも最後に祈るのが母だったことをよく覚えています。小学校4年の夏休みに父の転職で宮古から那覇に移りましたが、母はすぐに教会の女性たちと地域の子ども会を作り、紙芝居や歌を教えていました。

私が中学校2年生の時に「琉球ガールスカウト連盟」が設立され、私は友だちと入団してスカウト活動に夢中になりました。そして中学3年に上がる時、通っていた中学校が分離して新しくできた中学校に移りました。新学期の初め、性暴力未遂被害に遭いました。陽が落ちた夕暮れ、翌日必要な英語のノートを買った帰りに、「自分は新しくできた中学校の英語の教師だ」と言う男性に声をかけられたのです。その言葉を素直に信じた私は、彼が「訪ねようとしている家が見つからない」というので、大きな畑の向こう側まで案内しました。すると男性は「ちょっとここで待っていて」と言って畑の真ん中に私を残して住宅のある方向に行き、しばらくして「家は見つかったけど留守だった」と戻ってきました。そして「これから教師になるからよろしくね」といって握手するふりをして、私をいきなり抱き寄せたのです。私はとても恐ろしくなって「先生でも失礼します！」と相手

を強く押したら、その人がひっくり返ったので、必死になって畑から溝を飛び越えてすぐ近くにある我が家に逃げ帰りました。家族に「先生と名乗る変な人がいた」と話すと、弟は男が追いかけてくるかもしれないとバットを構えていましたが、男性は来ませんでした。次の日に母が学校に行き担任教師に確認したら、新しい教師が来る予定はないとわかり、職員会議でも取り上げ、那覇地区の学校に情報を出しましたが、実際に被害にあった子がいることも明らかになりました。

性暴力被害は未遂だったとはいえ、その時の恐怖と、必死で逃げた経験や痛みは、今でも強姦救援センターでさまざまな体験を聞きながらよく思い出します。こうした経験をする子ども・女性たちが今もたくさんいるのです。

そして子どもの頃のもう一つの痛みの記憶は、母に厳しく左利きを矯正されたことです。母はとても愛情深い人でしたが、明治生まれで左利きを認めませんでした。その当時は、左利きはなにか「間違っている」ものであり、障がいとも見なされるほどのものでした。そのため母は私が小さな時から左手を使う度にその手を叩いて右手に持ちかえさせていたのです。それは学校でも同じで、小学2年生の時に教室で左手を使っていたら担任の男の先生が「また左手を使って」と言って私の筆箱を窓の外に投げ捨てたことがありました。つまり家庭においても学校においても、左利きを「直す」ことが大切な教育だと思われていたわけです。

これらの性被害体験と左利きを矯正された経験はいずれも自分にとって痛みの記憶ですが、いま振り返ると私が人権問題に敏感に反応し、ガールスカウト活動に熱心になったことともつながっているのではないかと思います。つまり社会の中で暴力にあたり、排除されたり、馬鹿にされたり、あるいは「普通」じゃないと思われたり、そういう経験が自分の内側にもあって、それが人権問題に対する怒りにつながっていったのではないかと。自分も含め多くの人が「正しい社会の仕組み」というものを内在化して、そこから差別や偏見や排除をしている、それをしている側は「正しい」と思い込んでいる社会の仕組みに則っているに過ぎないのだけでも、それを受ける側はとても傷を負う、そのことをこうした経験から感じてきたと思います。

## 2. 高校から大学卒業まで一キリスト者として歩み始める

私が洗礼を受けたのは高校1年生の時でしたが、それはアジアで初めて開かれたフィリピンでの「ガールスカウト世界キャンプ」に2人のスカウト代表のひとりとして参加したことがきっかけでした。世界22ヶ国から約1千名のスカウトが

参加したキャンプの期間中、それぞれの宗教で礼拝を守る時間があり、その時に自分が神様への信仰や、生き方の基本としての信仰を持っていないことを痛感しました。そこで帰国後すぐに教会の高校生会の活動に関わり、その年のクリスマスに洗礼を受けました。洗礼を受ける日の早朝に家の後に広がる畑の端っこで、「私にしっかりと愛の働きをさせてください」と一生懸命に祈ったことを今もよく覚えていています。

高校卒業後の進路を神学校と決めていましたが姉に反対されて、設立3年目の沖縄キリスト教学院短大キリスト教学科に入学しました。入学して3ヶ月後に宮森小学校に米軍の戦闘機が墜落して、児童生徒と教師の17人が死亡するという大惨事が起きました。ニュースを聞き全学生40名が授業を中断して現場に駆けつけたのですが、あまりにひどい状況の中必死で活動をしたためか、自分自身はそのときの記憶が抜け落ちているのです。沖縄の現実を突きつけられた出来事でした。

短大を卒業した1961年からは2年間、フィリピン・メソジスト系のハリスメモリアル大学に留学し、宗教教育科で学びました。その大学はマレーシア、シンガポール、インドネシア、台湾、そして韓国からの留学生を受け入れていて、毎週の教会実習と全学生合唱発表会は素晴らしい経験でした。特に留学中の強い影響を受けた経験が二つあります。一つは夏休みに地方出身のクラスメイトの家に滞在した時、楽しい祭りが終わった後の夜更け、大人たちが集まって戦争体験を語っていたことです。戦後15年目で、いまだ多くの人々が日本軍による殺戮で家族を失う恐怖の体験を語り合っていました。大人たちは私の存在にハッと気づき、「あなたは沖縄だから、沖縄は日本ではないから」と言って慰めてくれましたが、私はその時初めて、過去の戦争は沖縄の戦争被害だけではなく、アジアの人々に多大な傷を残しているのだということを実感しました。もう一つはクリスマス休暇に別のクラスメイトの家を訪ねた時です。マニラからバスで約4時間のオロンガポ市の街は、沖縄に戻ったかと錯覚するほど沖縄のコザの街にそっくりだったのです。オロンガポ市にはアジア最大の米海軍基地があって、沖縄のコザの街と同じく基地の街だったのですが、“Pawn shop”（質屋）、“Bar”と英語の看板が並び米兵にあふれる街を目にして、改めて米軍の駐留とそこで生きる女性たちの状況をフィリピン留学で知らされました。

フィリピンから帰国後には聖和女子短大宗教教育学科3年制の最後のクラスに編入しました。卒業後の1965年4月に結婚し、夫はキリスト教学生センター主事となり、私は沖縄キリスト教団の教育・青年・婦人会担当主事、キリスト教学院

教務などを務め、その後沖縄キリスト教団主事となりました。

主事の仕事の中で、矯風会の高橋喜久江氏の来沖を受け、沖縄がまだ売春防止法の成立を見ない理由を立法院議会議員数名に面会して法成立に向けて促し、また、売春問題に取り組む女性たちへの聞き取りを行いました。彼女に同行する中で、私自身は沖縄の売春の実態、沖縄の女性の問題に対して強く意識するようになりました。

1969年2月には沖縄キリスト教団と日本基督教団との合同が成立しました。

### 3. 東京での10年—アジアの女たちの会、東京都女性相談センター

1970年初めに夫の母の看病のため、夫婦とも仕事を辞め大阪へ移動し、私は毎日子どもを連れて病院通いをしましたが、義母が回復し、その秋に東京へ引越しました。親子3人住み込みの仕事として得たのは早稲田大学 YMCA 信愛学舎の寮母の仕事です。男子大学生18人の朝晩の食事を約6ヶ月担当しました。当時の舎監は東海林路得子さん・勤さん夫妻です。翌年から夫は早稲田奉仕園の主事となって「足で体験する東南アジアをセミナー」や「アジアの語学講座」などを開設しました。私も早稲田奉仕園で女性たちと「アジア女性セミナー」という勉強会などを開催しました。

1975年は国連婦人年でメキシコの第一回世界女性会議が開催されましたが、それに関連したシンポジウムが東京 YWCA で開かれて、私もシンポジストのひとりでした。同じ出席者の新宿区婦人相談員兼松佐知子さんの発言に強い感銘を受けて、シンポジウムが終わった直後に「あなたのようにするにはどうしたらよいですか」と彼女に相談したところ、売春防止法が成立してからずっと婦人相談員をしてきたが、その前に1年間東京都立社会事業学校で学んだことを知りました。それを聞いて私もすぐに決意して、翌76年に35歳で東京都社会事業学校に入学して1年学びました。実はその一年は東京の女性たちの運動が実を結び、東京都婦人相談所が女性のさまざまな相談に門戸を開くため電話相談が新設されたのです。そこで1977年に私は女性電話相談員第1号に採用され4年働きました。

電話相談では、DV（家庭内暴力）の相談をたくさん受けました。相談者の夫の職業には、労組の委員長、弁護士、精神科医、大学助教授、あるいは牧師がありました。社会的に地位の高い夫の体裁を守るため、外に相談することもできず、密室の中で暴力を受け続けている女性たちがたくさんいることを知り、愕然としました。実父から性虐待を受け続けていた若い女性を、電話線を手繰るようにし

て何とか保護したこともあります。

実は、勤務3年目に女性相談センター所長から、離職する男性相談員の後任に誰か紹介してほしいと頼まれ、まだ面識もなく、書かれた文章に感銘を受けていた大島静子さんを紹介して、採用になりました。彼女と同僚として働く中で、私には、毎日がどれほど多くの学びがあったか計り知れません。

#### 4. 沖縄に帰郷し婦人相談員、市議会議員に

1981年、東京神学大学を卒業した夫が沖縄の西原教会から招聘を受けて一緒に帰郷しました。その西原町には、ベトナム戦争時代米兵相手に売春の仕事についていて、その後心身にさまざまな支障を抱えた女性たちが生活する「うるま婦人寮」がありました。私はそこにボランティアとして1年通い、女性たちと一緒に袋貼りなどの作業をしながら彼女たちの半生を聴きましたが、翌年からは7年間那覇市婦人相談員として働く中で、何人かの女性たちとつながっていきました。

女性が女性であるがゆえに受ける暴力には、性暴力やDVなどの直接的な暴力のほか、社会慣習に根付いた差別もあります。家族を支えるための売春や、男性に巧妙に言いくるめられて川崎のトルコ風呂に送り込まれたりする例などもありました。トルコ風呂で働くことに抵抗して男から暴力を振るわれ、トルコ風呂で一緒に働いていた他の女性たちが彼女の体の青アザに気がついて、旅費をカンパして沖縄に逃がしてくれた女性にも出会いました。

慣習による暴力では、たとえば沖縄で娘を4人産み続けた女性からの相談がありました。彼女は本家の長男の嫁として、後継ぎの男児を産む期待が強く、3人続けて娘を生み、姑に「もういい加減にしろ」と言われてしまった。ところが4人目も女の子だった。出産後退院して家に帰り、朝外にごみ袋を出していたとき、お隣の女性に「奥さん、予定日、いつ?」と聞かれ、とっさに「来週」と答えてしまった。そして彼女は家に駆け戻り、部屋に寝ている赤ちゃんを抱いて泣いたというのです。つまり彼女は自分と同じ性で産まれた子を誇れなかったのですね。もし3人目に男の子が産まれていたら、彼女は4人目を産む必要もなかったでしょう。そんなふうには、沖縄の慣習の中には男児を産むべしという期待する地域もあり、それに応えなくてはいけないと思われています。だからこそ、それに応えられない女性たちの痛みが大きいのですね。

またある女性は、アパートは安全ではない、すぐに“組織”に侵入されてレイプされるという強い恐れを持っていたため、荷物をコインロッカーに預けて、昼

間は映画館で眠り、夜は24時間営業のハンバーガーショップで過ごしていました。そういう風にして必死で暴力を受けないように生きていた彼女が、ある時本当にひどい暴力を受けて入院したのです。知らせを受けて病院に行ったら本当に目を疑うようなひどいけがを負っていて、「あーっ」とびっくりした私。そうしたら彼女が「高里さん、やっとわかったでしょう」と言うんです。おそらく彼女は自分がずっと訴え続けていても私が本当には彼女の抱く恐怖を信じていないと気づいていたのだと思います。私自身、女性たちのさまざまな悩みや苦しみに出会って関わっていく中で「支援する」と言いながらも、実際にはどれほど相手の言うことを受け止めて、言葉面だけではない「信じる」ことをできていたか、それを突き付けられました。

また、ひどいDVから逃れる母子を、カトリックのシスターにお願いして修道院に保護してもらった後県外に逃がすことができました。DV夫はいろいろな人を脅して、その修道院付属の幼稚園児まで拉致すると脅しました。それで公的な機関の関係者が市役所に集まり対処策を協議しました。行政の長たちはもう幼稚園児まで脅されているような状況では行政の対応も限界だ、母子の居場所を加害者に知らせるべきだ、と言い出したのです。そこに同席していたシスターが「弱い人を助けるのはたやすいことだと思っていましたが、実際にはどんなに力のあることか、そしてどんなに大事なことをいま私たちは経験しております」と言って、頑としてその母子の居場所は渡さないとおっしゃったのです。それで、行政の人たちも「シスターがそうおっしゃるなら、もう少しがんばりましょう」ということになりました。こんな風に教会の現場で素晴らしい働きをしてくださる方もいらして、勇気づけられます。

そんなさまざまな相談を受ける中で、婦人相談員をしているだけではだめだと感じさせられる事件が起きました。ある悪徳売春業者の下で働かされていた女性が逃げて婦人寮に保護され、決心してその業者を警察に訴えました。警察が内偵を進めなんとか事件化まで漕ぎ着けました。ところが警察から書類を受けた検察庁の担当検事が、婦人寮の課長を呼び、「これはやりがいのないケースだ」といって訴えを取り下げさせてしまったのです。実は彼女は3人の子どもを抱えた生活苦の中で、小売り電気店で短期ローンを組んで購入した商品を、すぐリサイクル店に売って現金を得ていたため、何軒かの電気店に借金を負っていました。検察官の目には、彼女のそういう行動も悪徳売春業者の犯罪行為と同類に見えたのでしょう。それで事件を取り下げた婦人寮の課長の判断を知って、女性は怒り失望

していなくなっていました。

これを知った私は、もう婦人相談員をしている場合ではないと思い、1989年那覇市議会議員に立候補しました。相談を受けてひとつひとつ対応することも大切だけでも、検事や課長も含め、こういう社会の意識構造自体に取り組みなければ女性への差別はなくなれないと思いました。女性たち中心の選挙運動でのキャッチフレーズは「嬉しい町、作りませんか」というものでした。「嬉」という漢字は「女+喜」です。みんなが本当に伸びやかに、一人一人が大事にされる、一人一人の人権が尊重されるような社会、という思いを込めました。座右の銘は「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」です。私は、一貫して無所属の革新議員として働きましたが、4期目をあと1年残したとき、革新政党から那覇市長選挙の統一候補として出馬しました。しかし残念ながら落選しました。

那覇市の市議会議員になるためには、西原町の牧師館から那覇市に転居する必要がありました。実は立候補することを私の両親に伝えたら、キリスト者の母は「牧師の妻としての仕事もたくさんあるのに、議員になっていいの」と驚きましたが、夫が「僕は自立した男ですから、大丈夫です」と答えてくれました。

選挙には、多くの女性たち、西原教会の会員やクリスチャン総出の応援もあって、連続4期当選することができました。一方で私の中では、キリスト者として職業の一つという意識が強くあったので、「私には教会があります」と日曜日の予定を入れないようにしてもらっていました。さらには市議会議員をしながら沖縄教区の総会議員、常置委員、沖縄教区からの教団総会議員、そして教団常議員として信仰生活を続けていたわけです。

## 5. キリスト者として働くとは

日本基督教団の性差別問題特別委員会委員にもなりましたが、教団の問題は本当に多方面で感じていました。沖縄教区に対するあまりにもひどい扱いや、同性愛者に対する差別事件など、ひどいことにたくさん直面して、私自身日本基督教団を離脱しようかと思うくらい、その差別性や偏狭性を感じ続けてきました。

夫は1996年に亡くなりましたが、当時彼は沖縄教区の総会議長でした。議長としての最後の仕事は教団総会に向けて、日本基督教団の名称変更を求める議案を準備したことで、彼の死後の沖縄教区総会で採択されました。そもそも1969年に沖縄キリスト教団と日本基督教団とが合同した際には「復帰の先取り」というように言われましたけど、それは決して対等ではなく、大が小を飲み込むような形

でなされてしまった。だから沖縄教区としてはその合同を捉え直すという意味で「日本合同キリスト教会」という名称を教団総会へ提案したのです。

その議案は各教区総会での十分な審議もなく、日本基督教団の3総会期を持ち越された後、審理未了廃案となってしまいました。「日本基督教団」の名称は、戦時下に政府から与えられたもので、この名称を神の摂理によるもの、伝統あるものとして後生大事にしているのですよね。戦後日本基督教団からはホーリネスやバプテストなどが出ていったにもかかわらず、です。もしあの時、小さい者である沖縄教区の提案とその意図が全教区でも審議されていたら、日本基督教団自体も改革される契機になったのではないかと思います、まったくそうはならなかったのが現実です。

沖縄は独自の歴史・文化を持ち、日本に併合され、過去の戦争では本土を守るための捨て石戦で、人口の4分の1を失う壮絶な地上戦場となり、生存者は例外なく強制的に16ヶ所の収容所に入れられました。その収容所の中で賛美歌を歌い、祈り合い、戦後の沖縄の教会活動がスタートしています。戦前の沖縄の教会牧師たちは県外に戻り、戦後の沖縄は信徒たちにより教会が形成されてきました。

戦後、圧倒的に男性人口を戦争で失い、生活困窮の母子家庭を支援するため、教会女性たちは鶏を配って養鶏を指導し、母子家庭が卵を食べて栄養をつけるのもよし、収入を得るのもよしとしたといいます。また、母子寮建設と幼児教育に取り組み、米軍の払い下げ衣類を新しいものに編み直して販売し資金を生み出しました。教団婦人会の事務所にはそういう織物の材料などがたくさんあったのを憶えています。当時教会の男性牧師たちは女性たちの教会を超えてつながり活動するのを必ずしも快く思わなかったそうですが、そんな批判はものともせず、私たちは必要な支援のために助け合ってきました。そういう女性たちの働きの上に今の沖縄の教会があるんですね。

そういう背景を持つ沖縄の教会だからこそ、沖縄という地が排除され米軍占領地となった歴史と同時にこの地が抱えている矛盾、ひどい慣習にしっかりと向き合って、曲がったものをまっすぐにするような働きをすべきだと思っています。沖縄の教会は沖縄が歴史的に置かれているこうした状況に対してしっかり「ノー」と言える存在になっていかなければいけないと思います。

それと同時に、婦人相談員や議員の活動と並行してキリスト教会での活動をしなから、この社会の中での差別や排除にしっかりと目を向けない教会のあり方や意識に強い怒りを感じていました。たとえば時々「苦しんでいる人を助けるあな

たの仕事は本当にとっても大事よね、きっとそういう人たちに神さまの御言葉を伝える機会もあるんでしょう」とキリスト者から言われることがあります。そういう時「いえ、反対なんです。彼女たちの口から御言葉が聞こえてくるんです」と答えます。実際にさまざまなケースに関わっていて、自分自身が問われる経験をたくさんしてきました。

## 6. キャロリン・フランシスさんという同労者を得て

### 一神は必要な助け手を送ってくださった！

沖縄で女性に対する差別、暴力の問題に取り組んできた私たちには、確かな同労者が与えられていました。その方は、キャロリン・フランシスさん。彼女はアメリカ合同メソジスト教会から派遣された宣教師として来日し、30年間、教育、社会問題、アジアの女性のためのシェルター（HELP）のケースワーカーなどとして働いてきました。そして最後の10年間を沖縄の女性たちの運動に注ぎ込んでくれました。キャロリンさんは、日本語力が完全に自由であるばかりでなく、フェミニスト神学を共有できる人で、沖縄の置かれた歴史的、政治的、社会的な女性の歴史を見据え、運動の担い手の一人となってくれました。米兵の性暴力を演じる無言劇では、加害者米兵役を一手に引き受けた迫真の演技力を見せましたが、米国人の彼女には心中複雑な思いがあっただろうと想像します。

1991年、フィリピンで起った今世紀最大のピナツポ火山噴火により、完全に灰で埋まってしまった状態のフィリピンの女性たちの苦境を訪ねて、HELP代表の大島静子さん、キャロリン・フランシスさんそして私の3人でオロンガボ市の女性たちを訪ねて、フィリピンの女性たちとの連携を深めました。

また、1995年に北京で開催された第4回国連世界女性会議に向けて、沖縄の女性たち71人は1年がかりで準備して沖縄の女性たちの課題を11ワークショップにまとめて発表しましたが、キャロリンさんはその事務局の中心メンバーとして資料を英訳し、国連本部へのNGO世界会議の登録を担ってくれました。そして、キャロリンさんと私を含め8人の女性で準備した「軍隊・その構造的暴力と女性」ワークショップでは、軍隊組織の侵略と暴力性の構造を告発しました。その内容は、①日本に開国を迫ったペリー米海軍総督率いる艦船が1853年琉球王国の泊港に停泊して水兵が沖縄の女性を強姦し、②日本帝国軍隊は第2次世界大戦中、戦争に勝つ手段として慰安婦制度を組み入れアジア諸国の女性たちを慰安婦に駆り出し、③戦後は、沖縄は米軍の占領下に置かれて米兵による暴力被害が社会を覆って

る、というものでした。

1995年に起きた3米兵による12歳の少女強姦事件は、女性たちが声を上げたことから県民大会にもつながったといえます。当初は、被害者の身を案じるあまりの配慮から、行政の長たちも事件の矮小化に努めました。しかし、北京から帰国した空港でその事件を知った女性たちが、翌日には記者会見を開き被害者への支援と米軍撤退を求めました。そのような経緯からようやく事件が公になったのですが、それがなかったら沖縄の為政者も被害者ではなく加害者を守ることになっていたでしょう。被害者を守るという口実のもと、実は暴力を黙認、容認し増強させる社会構造があるのです。

北京後もキャロリンさんは「強姦救援センター・沖縄 REICO」(REICO: Rape Emergency Intervention Counseling Center Okinawa)の設立に関わり、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」を共に立ち上げ、1996年に行ったアメリカ市民に沖縄の現状を訴える2週間の「アメリカ・ピース・キャラバン」ではサンフランシスコ、ワシントン、ニューヨーク、ハワイ行動で通訳・運転手・コーディネーターとして働き、そのピース・キャラバンの結果生まれた「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」の立ち上がりにも関わってくれました。また、そのピース・キャラバン中『性差別主義と戦争システム』の著者であるコロンビア大学平和教育センターのベティ・リアドン教授の授業に招待され、現在まで支援と連携が続いています。さまざまな声明文、抗議文など、さらに「沖縄・米兵による女性への性犯罪」年表の英訳作業も受け持ってくださいました。そのほかにもキャロリンさんと多くの行動を共にする中で、米国メソジスト合同教会のアジア宣教委員会、米クエーカー教会の会議、アメリカ社会学学会に招待されました。

「軍事主義を許さない国際ネットワーク」につながる韓国、フィリピン、グワム、アメリカ、ハワイ、プエルトリコの女性たちの運動は、軍事主義、ジェンダー差別、植民地主義と向き合い、軍事力によらない真の安全保障の構築こそ重要だと闘っています。

キャロリンさんが1999年に宣教師を引退し沖縄での働きを終えた時、教会内外、県内の多くの女性から彼女の働きに感謝と惜別が寄せられました。しかし、この沖縄の最も必要な時期に、キャロリンさんが沖縄に与えられていたことの大きさを改めて思います。キャロリンさんは2001年に「多田謠子反権力人権賞」を受賞しましたが、その内容は「基地の島沖縄における女性を支える運動」でした。

既存の教会制度や牧師中心主義に疑問を持つようになった私は、ある時から横

田幸子さんや依田康子さん、絹川久子さんなどのフェミニスト神学や女性神学の本を貪り読むようになりました。山口里子さんの本は全部持っています。それからフェミニスト聖書注解なども生きるために切実な思いで読んできました。ですから、私自身を支えるものはそういうところから来ていると感じています。

2019年の日本フェミニスト神学・宣教センターの最後の集会で、山口里子さんが「キリスト教の核心を受け入れなくてクリスチャンと言えるか」という問いかけをされましたけれども、私は自分を隠れキリシタンのように感じるがあります。つまり、たとえば私はイエスが処女マリアから生まれたとはとても思えない、でも思わなくて十分だと考えています。それよりも大切なのがイエスが示したような愛、そしてそこから出てくる救いのはずだ、と。イエスが女性の曲がった体をまっすぐにしたという話からは、さまざまな事柄にがんじがらめにされている人を回復させる、その人の尊厳を回復するというメッセージを受け取って、イエスの存在、イエスの救いはまさにそういうところにあるのだと感じます。

## 7. 尊厳の回復をもとめて

私が今取り組んでいるのは、たとえばベトナム戦争時の沖縄で排除され、殺され、捨てられた女性たちの尊厳を回復するという作業です。もうだいぶ前から「沖縄・米兵による女性への性犯罪」年表作りにも取り組んできましたが、その過程で気づかされたのが、たとえば家庭の貧困のため売春を強いられた女性や米兵から暴力を受けた女性がたくさんいたということです。彼女たちが従事した売春業が、ある意味でベトナム戦争期の沖縄社会を経済的に根底で支えていたと言えます。そういう女性たちのことを記憶し、記録して、その尊厳を回復したいと思うのです。

それから、戦前まであった沖縄の辻遊廓にも貧しい地方の子どもたちが4～5歳で売られていました。この辻遊廓は琉球王朝の中で中国の役人、商人の接待の場所であり、富裕層や中国から来た人が行くような場所でもあった。そしてその売り上げが当時の那覇市の税収の6分の1から4分の1を占めていたというほど、経済的にもその社会を支えていたわけです。そして、こうした暴力を行使してもいい地域を特別に設置することによって社会全体の安定が図られていた。

こういう過去の事例を思い起こすと、いま私たちが謳う平和とか調和とか、あるいは教会の安定だとかそういうものが実はそもそも暴力という存在の上に成り立っているのではないか、だからむしろそれを壊していかなければならないので

はないか、と思うのです。ベトナム戦争時、沖縄では1年間に5人もの女性が殺されています。殺されて、裸で溝に放り込まれた女性たちについては、新聞で3行ほどの小さい記事になっただけです。そのようにして女性たちの存在はまったく知られないままに来てしまいました。私自身も知らなかった。そんな女性たちの存在の上に、現在があるわけです。

ベトナム戦争の時期に沖縄で女性たちを絞め殺した米兵たちは、しかし、戦争の武器となりアジアへ、女性への差別を刷り込まれ、戦争に行かされ、恐怖に放り込まれた人たちだったのだらうと思います。私はこれまで出会った女性たちは例外なく皆、絞め殺されそうになった経験を持っています。その米兵たちは特別な人ではなくて普通の兵士たち、家庭では善良な夫、息子たちであったかも知れない。ベトナムのジャングルから戻ってきてその恐怖をなお引きずっている男たちが、ジャングルでベトコンと戦っているつもりで隣に寝ている女性を絞め殺そうになることがあるのです。以前アメリカの「デモクラシー・ナウ」のテレビ番組で、海兵隊の退役軍人が、就寝中に妻を絞め殺しそうになり、それ以来寝室は別にして、と話していました。みな激しいトラウマから、そのようなことを起こしてしまう。

そしてもうひとつの大きな問題は、このような暴力の犠牲になった沖縄の女性たちがまったく記憶されていなかったということです。ベトナム戦争時代、女性が絞め殺されても、抗議の県民大会は開かれませんでした。

この社会には性差別だけではなくて、いろいろな問題があります。先住民の問題も、LGBTの問題も、新しい問題がどんどん出てきますよね。たとえば私の左利きがかつては問題とされたけども今はそうではないように変わっていく部分もありますが、しかしイエスの生きた時代から2000年経っても社会的な抑圧にがんじがらめにされている人はなおたくさんいますし、誰かを排除し、切り捨てて成り立つ制度、特定の人に暴力を振るうような社会がいまだに続いている。このことを、どう捉えたら良いのかと考えます。たとえば日本では、2017年ようやく強姦罪が改正されて、強制性交罪等となり、親告罪が廃止され、量刑が少し重くなりましたが、これは110年ぶりの改正でした。改正に110年もかかったということは、やはりこの日本社会に深く家長長制が根付いていて、税制にしても労働環境にしてもすべてその枠組みの中に組み込まれているということの証しだと思います。いくら憲法で個人の尊厳や平等が謳われていても、父権制社会は脈々と続いている。このことに愕然とします。

それから天皇制がいかにこの社会に張り巡らされているかということも実感しています。私は人間の格差を是認する天皇制を否定しているのですが、議員を4期務め、副議長も経験した人間として叙勲の通知がきました。明確に断ったのにその数年後、もう一度「お気持ちは変わりませんか」という問い合わせがきたのです。そんな形で天皇制が網の目のように私たちの社会のシステムを包んでいるのだなとよくわかりました。残念に思いますが、長年調停委員など一定の公務を務めた人、行政、議会、国会議員などを務めた者は叙勲や褒賞を受けるのです。叙勲を受けてホテルで祝賀会などをしていますが、この天皇制があらゆる領域、あらゆる職業に網の目のように張り巡らされていることを痛感します。こういうシステムをどうしたら変えていけるのかは大きな課題だと思います。

しかし一方で私が希望を見出しているのは、さまざまな国際会議などで出会う女性たちの存在です。女性の性的搾取の問題や売春のことをテーマにした国際会議などでは、草の根でがんばっている女性たちに出会ってきました。それぞれの国、地域には各地の慣習に深く根付いた差別の問題が必ずあります。けれど女性たちはそれぞれの場所で諦めずにそうした強固な壁を少しずつ壊すような活動をしてきたのです。どんなに強固な壁でも、必ずどこかから劣化が起こる、変化が起こる。それを信じて活動している女性たちの姿を見ると、ああ、また沖縄でもがんばろうと思えます。

(2021年3月27日 第8回研究会)

【応答】高里鈴代さんの講演を聞いて

山口 里子

敬愛する鈴代さんの話には共感がいっぱい。鈴代さんは沖縄基地関連で性暴力のリスクを経験し、幼い頃から「左利き」を否定されることの「傷」の記憶が、強い人権意識と活動に繋がった。また、留学でアジア諸国などの人々との出会いで視野を広げられ、余りに酷い女性状況が続く現実に直面して、植民地主義、天皇制、父権制社会構造・意識の変革を不可欠と痛感する。こうして議員に成られた。

私は乳児期の大火傷で傷・虚弱な体を持ちつつ育ったが、経済問題で大学入学を断念し、仕事と学び両立のために苦闘する中で社会の差別に直面。そして女性解放運動を始めアイヌ・部落・障害などの差別と闘う草の根運動に繋がって視野を広げられた。しかし教会には疑問だらけだった。

これは、鈴代さんが痛感した日本基督教団のひどい沖縄差別や、既存の教会制度、社会の抑圧状況にきちんと向き合わない教会の偏狭性とも繋がる。結局、社会も教会も父権制構造が根底にある。それで私はキリスト教を根本から問い直そうと奨学金留学でフェミニスト神学を学ぶ。そこで世界の様々な人々と出会い学び合い、憤りも希望も与えられた。それは鈴代さんが、世界の色々な地域の人々との繋がりでも学び合い闘い続けるなら、どんなに強固な壁でも変化が起きていくと、勇気と希望を与えられたのと結びつく。

鈴代さんは、特にキャロリン・フランシスとの出会い・同労の貴重さと共に、人々との出会い・共働の意義を述べられた。それは、沖縄の教会女性たちが困窮女性達に寄り添い支援し、そういう働きで今の教会があるということにも繋がるだろう。ちなみに、私は学生時代に「知的障害者施設」でのボランティア活動でキャロリン・フランシスと出会い、彼女が寄り添う女性たちの現状を、作業しながら聞かせていただいていた。

鈴代さんの座右の銘のように「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」姿勢が本当に大切と思う。だが、女性を犠牲にする地域を設定かつ隠蔽して、表面的な社会安定が作られる現実、沖縄女性たちは直面させられ続けている。これは東京生活の私として強く痛感させられた。

今、鈴代さんは、非常に困難な中での重要な行動が看過・忘却されてきた女性たちや、排除され生命を奪われた女性たちの尊厳回復を求めて、沈黙の声を聞き歴史の真実に向けて記憶・記録する取り組みをしている。私も根底で繋がる思いで、父権制的キリスト教で削除・歪曲された「女／他者」たちの声・尊厳・正義を回復し、歴史・記憶の再構築で新しい道を拓きたい。

今回、深い印象を受けた言葉：神の言葉は、苦しんでいる人々に伝えるよりも、その人々からこそ聞こえてくる。「行いの神学」の先輩のこの思いを心底から共感して継承したら、キリスト教も社会も変えられるのではないかな？